



骨と関節をイメージした
整形外科アピールマーク

かん せつ 関節リウマチ



「運動器の10年」世界運動
動く喜び 動ける幸せ

● 症状 ●

最初は両方の手や足の指の関節が対称的に腫れて、とくに朝、こわばるようになります。また、人によっては膝関節や股関節など大きな関節にも病変が進み、水が溜まり、動きにくくなり、痛みのために日常生活に困難をおぼえるようになります。どの年代でもおこりますが、特に30~40歳代の女性に多く発症します。軽症の人もいれば重症の人もいて症状も多彩です。早めの診断・治療が必要です。

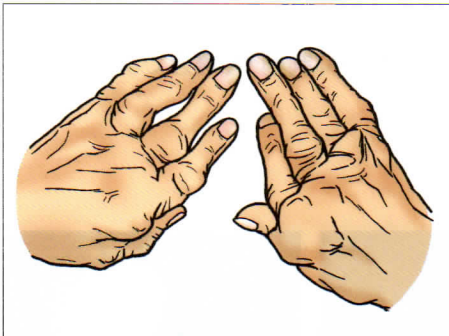
関節リウマチは、関節だけの病気ではなく全身病ですので、貧血症状がでたり、体がだるくなったり、微熱がでることもあり、こうなると症状が悪化します。



【全身の関節に進行していく病型の患者さんの場合】

指や手首の関節が破壊され、指が短くなったり、関節が脱臼して強く変形することがあります。足のゆびにも変形がおこります。

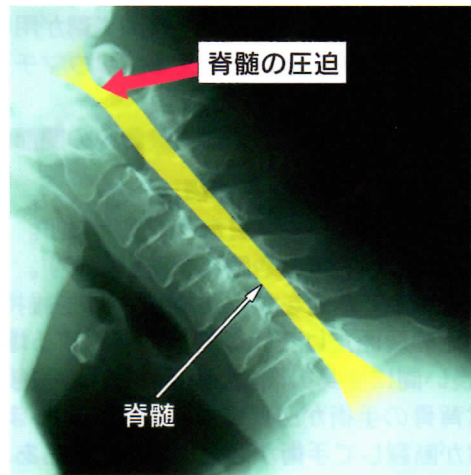
一番こわいのは、首の一番上の部分で背骨が前にずれてしまい、脊髄が圧迫され、手足が麻痺したり、呼吸がしにくくなる場合があることです。



関節リウマチの手の変形



関節リウマチの足の変形



脊髄の圧迫

脊髄

● 原因・病態 ●

遺伝的要因や細菌・ウイルスの感染などが考えられていますが原因はまだよくわかっていません。関節リウマチの病態は、自己免疫疾患と考えられています。自分の身体の一部を自分のものではないとして、これに対する抗体をつくって反応をおこしてしまい、このために関節液をつくる滑膜という組織にリンパ系細胞が集まって反応がおこります。そして、滑膜はさまざまな破壊物質の産生工場となって、しだいに自分の軟骨や骨を破壊していきます。重症の場合には、関節は固まったり、逆にゆるんで大きく変形したりします。そして最終的に関節が破壊されつくと、変形を残して炎症はおさまりません。

診断

アメリカリウマチ学会の診断基準(1987)で診断します。診断基準は、

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1. 朝のこわばり(1時間以上持続) | 2. 3カ所以上の関節炎 |
| 3. 手の関節炎 | 4. 対称性関節炎 |
| 5. リウマトイド結節 | 6. 血清リウマトイド因子 |
| 7. X線(レントゲン)写真上の変化 | |

の7項目からできています。これらのうち、4項目以上あると関節リウマチと診断します。

ただし、1～4の症状は6週間以上持続していることが必要です。

従って、「リウマチの血液検査(血清リウマトイド因子)が陽性」というのは診断基準の一つを満たすのみであり、この結果だけで関節リウマチと診断することはできません。さらに、最近ではより感受性の高い検査法(CA-RF、MMP-3、抗CCP抗体など)が開発され、補助診断に用いられています。



リウマトイド結節

治療

関節リウマチは早期の治療が大切です。

[薬物療法]

- ・炎症を抑える非ステロイド性消炎剤が用いられ、炎症が強い場合はステロイド剤が使われます。
- ・関節リウマチの進行を抑える抗リウマチ剤が用いられ、効果不十分の場合は免疫抑制剤や、最近では生物学的製剤も使われつつあります。
- ・ステロイド剤やヒアルロン酸製剤の関節内注射が行われることもあります。

[リハビリテーション・理学療法]

- ・炎症のある関節を装具などで支えます。
- ・温めたりして痛みや腫れを減らします。
- ・運動療法で筋肉をつけ、関節可動域を維持します。

手や足の周囲だけで比較的軽く経過する場合がありますが、長い間に全身の関節に炎症が進み、最後には関節やときには背骨の手術が必要になる場合もあります。また、指の伸筋腱が断裂して手術が必要になることもあります。

[手術療法]

- ・関節鏡で観察しながら、関節内の洗浄や滑膜などの炎症組織の切除を行います。
- ・切れた腱などいたんだ関節周囲の組織を修復します。
- ・変形やゆるみがおこった関節を、使いやすい位置で固定します。
- ・関節リウマチでいたんでしまった手足の関節は、人工関節で置き換えることができます。



人工膝関節



人工股関節